

日本学術会議の創立60周年を迎えての会長談話

日本学術会議は、戦後間もない昭和24年1月20日、科学が文化国家の基礎であるという確信に基づいて、科学の向上発達を図るとともに、その成果を行政、産業、国民生活に反映させることを目的として設立されました。

その後本日でちょうど60年が経ち、日本学術会議は還暦を迎えました。日本学術会議は、平成17年10月に、会員選考方法の変更、定年制の導入、部の再編成など、組織体制の大幅な改革を行いました。その後1期3年間を経てようやく本当の意味での活動の基盤ができてきたのではないかと考えています。

日本学術会議は、この60年間、わが国の科学者の内外に対する代表機関として、国内においては、政府に対する勧告・政策提言等を発出するとともに、科学の役割について国民の理解を深めるべく、公開学術講演会、シンポジウム等を開催してまいりました。また、国外に対しては、世界の主要な国際学術団体に加盟するとともに、各国で開催される国際会議等に代表を派遣するなどの活動を展開してまいりました。

このように、日本学術会議は、その創立以来様々な成果を挙げてきたわけですが、それだけに満足するのではなく、今後、学術の更なる発展のため、ますます重要な役割を果たしてゆくとの決意を持って様々な課題に取り組んでいかなければなりません。

例えば、現在日本学術会議に取り組んでいる主な課題の一つとして、各学術分野の発展の在り方、及びそれを踏まえた人類的課題に応える研究の在り方など、わが国の学術の長期展望を示す「日本の展望」の取りまとめがあります。この「日本の展望」の取りまとめは、人文・社会科学から自然科学まで、あらゆる学問分野の第一人者が集う日本学術会議の特長を十全に活かすことができる、大きな機会です。

一方で、国際的な活動に目を転ずると、最近では、黒田玲子会員が、いわば科学者の国連とも言えるICSU（国際科学会議）の副会長に選出され、また、日本生まれの4名の科学者がノーベル賞を受賞されるなど喜ばしいニュースが続いており、科学の世界で日本のプレゼンスを高める絶好の状況にあります。こうした機会を捉え、G8学術会議やアジア学術会議での活動を始めとして、さらに国際的な学術の発展にも貢献していかなければなりません。

日本学術会議は、こうした数々の課題に積極的に取り組み、着実に成果を出してゆくことによって、人類社会の福祉の増進に貢献し、学術の進歩へ寄与してまいります。日本学術会議の創立60周年を迎えた本日、日本の未来を拓くため、これまでも増して積極的に活動してゆく決意をここに表明します。

国民の皆様の今まで以上の御理解、御支援をどうぞよろしくお願いいたします。

平成21年1月20日

日本学術会議会長

金澤 一郎